

『ニーベルンゲンの歌』の写本について

—BとCを中心に— その3

武 市 修

前稿ではNLのB版の基本構想を検証したのであるが、本稿では、C版のそれがどのようなものを、B版とC版で叙述内容が異なる箇所、B版にはなくC版で追加されている詩節を比較、検討して調べてみたい。

1

まず、C版で目に付くのは、キリスト教を意識的に強調しようとする姿勢である。第21歌章で、フンの国に嫁ぎ行くクリエムヒルトをパッサウに迎え、ベッヒェラーレンまで見送った司教ピルグリムが、別れに際し、姪のために願ったのは、B版では「彼女が健やかに過ごしてくれること」(B1330, 2)であったが、C版では「彼女が(エッツェル)王を改宗させること(bekêren)」(C1357, 2)となっている。bekêren という語は中高ドイツ語では、現代語の bekehren のように特に宗教的な意味で用いられる訳ではなく、他動詞としては一般に「～を～へ向ける」という意味である²¹。ところが、NLではこの語はB版には一度も現われず、C版で二度だけ用いられており、しかもそれは現代語と同じ「正しい信仰に向ける」、「改宗させる」という意味である²²。上の例以外にもう一個所は、第20歌章の追加の詩節で、エッツェルからの求婚の使者、リュエデゲール言葉の中に出て来る。なかなか色よい返事をしてくれないクリエムヒルトに、彼女の身に加えられた苦しみにはどんなことをしてでもその恨みを晴らすと約束したあと、リュエデゲールはなお相手が異教徒であることにこだわる彼女に対し、次のような言葉で主君の異教性を和らげようとする。

私の御主君は全くの異教徒という訳ではありません。

これは確かなことと思っ頂きたい。

あのお方は正しい信仰に目覚めていたのですから。

ただ、再び信仰から離れてしまわれただけなのです。

あなた様が結婚して下されば、あの方はまだ救われるでしょう。

(C1284)

何とかクリエムヒルトを説き伏せようとするリュエデゲールの、いささか苦しい弁明であるが、このようなキリスト教を意識した言い回しが、その他にも見られる。ブルゴント勢とフン族の凄惨な殺し合いで、両方のほとんどの勇士が討ち死にし、いよいよ最後の断末魔を迎える場面で、語り手は、

多くの国々から如何に大勢の者が、如何に多数の君侯たちが
この（ブルゴントの）小勢相手に、そこに集まっていたにしても、
彼らに立ち向かったのが、もしもキリスト教徒でなかったとしたら、
彼らも力を奮ってすべての異教徒から確かに

生き延びることができたであろうに。（C2351）

と付け加える。また、すでに第一稿でブルゴント族をニーベルンゲンと呼ぶのが不自然な個所として引用した「彼らと共にニーベルンゲンの勇士一千名が、鎖帷子に身を固め出で立った。彼らは故郷に幾多の美しい婦人を残して行ったが、その後互いに二度と相見ることにはなかった。ジーフリトの痛手を、今なおクリエムヒルトが悲しんでいたからである」（B1523）が、C版では次のように変わっている。

当時はまだ信仰心は薄かった。

それでも彼らはミサをあげてくれる司祭を一人連れて来ていた。

彼はかろうじて逃れ、無事国へ帰ることができたが、

他の者は皆フン族のもとで命を落とさねばならなかった。（C1559）

ここはキリスト教の強調というよりも、後に見るようにクリエムヒルトの印象を悪くするところを除いたとも取れるが、このように語り手の立場

を明確にしようとする姿勢は、キリスト教についてだけでなく、更に、主要な登場人物の描き方にも表われている。次にその点を少し詳しく見てみよう。

2

ラインの一行がフンの国に到着すると、クリエムヒルトはエッツェル王が客人を迎える前に、宮廷の儀礼を無視して、「偽りの心を抱きながらニーベルンゲンの人々を出迎えた」(B1737, 2)。本来なら彼女は王妃として出迎えを王に委ね、呼ばれるまで待っていなければならなかったはずであるが、はやる心を押さえ難く王に先駆けて彼らの前に立つ。そしてギーゼルヘルだけに接吻して歓迎の気持ちを表す。それに対しハゲネが非難すると、歓迎してもらえるだけのどんなものをヴォルメスの地から持って来たのかと詰問し、最初から対決の姿勢をあらわにする。王妃たる人が臣下の者から贈り物を受け取るなどということが分かっていたら、土産のひとつも持参するだけの富は自分にもあるのだが、という侮辱的なハゲネの言葉に、「ニーベルンゲンの宝をどこへやったのか」(B1741, 2)と、宝に直接言及する。招待した遠来の賓客を歓迎すべき宮廷の作法に反して、ハゲネの挑発にのったとはいえ、最初から敵対の姿勢を見せるクリエムヒルトは、宮廷の貴婦人としてのたしなみも忘れている。

武器を預けようとしなないハゲネたちの態度から、彼らがあらかじめ警告を受けていることを悟った彼女は、それが誰だか分かれば生かしてはおかないと息巻くが、ベルネのディエトリーヒから「鬼女」と罵られ、さすがに恥じ入らざるを得ない。そもそもクリエムヒルトが異教徒との結婚によって身を貶しめ、世間の噂になることも覚悟してフンの国に来ることを決心したのは、ひとえに、エッツェルの勢力を利用して、愛しいジーフリトの敵を討ちたいという思いからである。それもリュエデゲールが、彼女の身に加えられた危害に対しては、どんなことをしてもその恨みを晴らすと密かに約束したればこそであった。C版では、このようなクリエムヒルトの貞節 (triuwe) を強調し、それだけ一層復讐を正当化し、彼女の行動を弁護しようとする姿勢が明白に見て取れる。

先ず、第16歌章の後半で、急所に槍を突き立てられ、息も絶え絶えにな

ったジーフリトが、グンテルたちの卑劣な裏切りを責める場面で、『エッダ』のように残された息子の命を心配するのではなく⁸²、息子が将来、父を姻戚の者に暗殺されたという汚名を受けることになるだろうと嘆く（B 995=C1004）。そしてC版ではそのあとに続けて、グンテルに向かってジーフリトは、それまで困った時にはいつも命と名誉を守ってきてやったのに、差し伸べた援助の手にこんなひどい報い方をすると、未だかつてこれほどひどい殺人が行われたためしがない（C1005）と、口を極めて非難する。更に、「この殺人を今後いつの日かきっと後悔することになる。そなたは自分で自分を討つようなことをしたのだということを、しかと心得るがよい」（C1008, 2-4）と、後のクリエムヒルトの復讐を正当化するような詩節を挿入している。

ジーフリト暗殺後、毎日墓所を訪れ、亡き人の冥福を祈るクリエムヒルトの悲しみは、誰の慰めによっても癒されない。愛する人を悼む彼女の思いは、これまで女性が抱いたどんな悲しみよりも大きく、その嘆きは死に至るまで続いた。「後に勇士ジーフリトの妻は手ひどい復讐を遂げるのであった」（B1105, 4）が、C1116, 4 で「後にこの貞淑な妻は手ひどい復讐を遂げるのであった」と変えられている。そして後半は、もっぱらクリエムヒルトの復讐に焦点が絞られることになる。

クリエムヒルトがフンの国に興入して13年、エッツェルとの間に王子も生まれ、キリスト教の洗礼を受けさせて、オルトリエプと名付けられていた。王妃として何不自由ない境遇にいながらも、かつて故郷で味わわれたつらい思い、また幸福な榮譽に輝いていた日々が忘れられず、愛するジーフリトと共にすべてを奪ったハゲネに対する恨みを、いつか晴らすことができぬものか、と思いを巡らす毎日が続く。そんなある時、彼女は夢を見る。

「あの男をこの国へ呼び寄せることができれば、

それが叶うのだけれど。」

彼女は安らかな眠りの中で、弟ギーゼルヘルとしばしば

手を取り合って歩み、幾度も接吻する夢を見た。

やがて彼らは大きな苦しみを味わうことになるのであった。

思うに、邪悪な悪魔がクリエムヒルトを唆し、
和解のためにブルゴントの国で接吻した
ギーゼルヘルとの情愛を断たせたのであろう。
彼女の衣装は再び熱い涙でかきぬれるのであった。（B 1393-94）

一方で故郷での楽しい日々が忘れられず、ギーゼルヘルと睦まじく散歩する夢を見ながら、他方ではそれだけ一層、栄光に満ちた境遇を一変させたハゲネに対する憎しみが増すのであった。しかしギーゼルヘルとは和解の必要はなく、ブルゴントの国で和解のために接吻した相手はグンテルであり、これは明らかに間違いであるので、B版に基づいた刊行本でもここはグンテルに変えているが、ブルゴント一族の中でただ一人心を許せる弟との思い出と、それを台無しにしたハゲネの仕打ちを対比させ、彼女の心の振幅を描くB版に対し、C版では次のように内容的に変更を加えている。

彼女は母妃がフンの国に来てくれたらいいのにと願った。
安らかな眠りの中で弟ギーゼルヘルと手を取り合って、
エツェル王のそばを歩み、幾度も接吻を交わす夢を見た。
やがて彼らは大きな苦しみを味わうことになるのであった。
他にはどれほど恵まれていようとも、彼女は大きな心の痛手を
決して忘れることができなかった。いかなる時も心に
悲しみを抱き、それは人のよく知るところとなった。
彼女の衣装は再び熱い涙にかきぬれるのであった。（C 1420-21）

このようにC版では、ハゲネを何とかフンの国へ呼び寄せたいという、クリエムヒルトのあからさまな復讐欲を表すのを避け、母妃ウオテに会いたい、という娘の優しい情愛を描き、ギーゼルヘルと手を取り合って歩むのも、フンの国へ招いた時の情景へと変えている。悪魔に唆されたと思われるほど甚だしい敵意を肉親に対して抱くクリエムヒルト像は宮廷の *vrouwe* には余りに不似合いなので、ここで上のような改変を行ない、彼女の忘れ難い痛みを強調し、復讐の動機づけを強めたのであろう。

ブルゴントの一行がフンの国に入ったという知らせを聞いて、B版ではクリエムヒルトは窓辺に立って一門の者たちの到着を、まるで友が友を待

つように待ち焦がれる。彼女は一行が輝く鎖帷子に身を固め、新しい盾を手に入城して来るのを見て「ああ、嬉しいこと」と思わず洩らし、そのあとに「黄金の欲しい者は私の受けた悲しみを考えておくれ。その人にはいつまでも恩義を感じるでしょう」（B1717, 3a-4）と言う。ここには永年異教徒の中で暮らしてきたクリエムヒルトが、懐かしい血縁の情を押さえ難く、兄弟たちの到着を今か今かと待ち焦がれつつも、愛しい人を暗殺され、肉親の信頼を二度までも踏み躪られた裏切りを思うと、今こそ復讐の時が来たと思ひ込む、という複雑な心情が表れていると考えられるが、しかし、兄弟たちの武装を見て喜ぶというのはどうにも理解し難い。デ・ボア（Helmut de Boor）はこのずれを、クリエムヒルトが兄弟たちの側についていた古い伝説の名残であろうと言っている⁴⁾。C版では次のようにこの2節を全面的に改め、さらに1節追加して彼女の復讐の決意を強く前面に出している。つまりここはC版では、復讐すべき相手がやっと来たのを見て、それまでのつらい思いも少しは軽くなったことを述べているのであり、K. ドッレーゲ（K. Droege）も『ティドゥレクス・サガ』との比較から、C版では古い文学と新しい文学の間の矛盾を改めて、『サガ』と同じくクリエムヒルトの復讐心の強さを示したと言っている⁵⁾。

王妃は（ブルゴント一行の）到着の知らせを聞くと
心の重荷がいくぶん軽くなった。
彼女の祖国から多くの武士たちが来訪した。
そのためエツェル王は後に多くの心痛を味わうこととなった。
彼女は密かに思った。「さあ、これで何とかできそうだわ。
私の喜びをあんな風に奪った男を
この饗宴でひどい目に
遭わせてやりましょう。私は断固やり遂げるつもりです。
たとえ後はどうなろうと、この祝宴で
私から多くの喜びを奪ったあのひどい男に
何としても復讐するつもりです。
今、その償いをしてもらいましょう。」（C1755-57）

ミサのあと始まった紅白に分かれた騎馬試合で、フォルケールがフン族

の氣勢を殺ごうと、美しく着飾った一人の辺境伯を、血祭りに上げたので、その一族の者が敵を討とうといきりたったが、エツェル自ら間に入って争いを未然に防ぎ、その場を治めた。そしてそのあと、食事の席へと場面が移るのであるが、クリエムヒルトはハゲネを討つきっかけがなかなか掴めないで、不安になってくる。B版ではこの間の事情が、王族たちが席に付くまで長い間かかったとだけしか述べられず、このつながりが不自然で、クリエムヒルトが心配する必然性がはっきりしない。C版ではこのB1898の次に2節を追加し、その流れをよくしている。つまり、手勢を使ってハゲネを討とうとした最初の試みは失敗したが、翌日の槍試合でフン方とブルゴント側の間が一触即発の状況となった。フォルケールに討たれた辺境伯の一族の者たちが、折りあらば主人の仇討ちをしようとする饗宴の席へ武装して来たのである。これを見てエツェルは客人たちに危害が加えられないように、「もし客人に手出しをする者がいれば、首をはねられることになるぞ。このことをフン族の者にくれぐれも申し渡しておく」（C1944, 3-4）と釘をさす。このように王の介入によって、少なくともフン側から手出しができなくなった。そこでクリエムヒルトは思いあぐねて、ディエトリーヒに援助を仰ぐことにした。しかし身内の者を、しかも財宝のために討つ手助けなどする訳にはいかない、と主君に代わって答える老勇ヒルデブラントの言葉に対し、C版では追加の節（C1947）でクリエムヒルトは次のように応ずる。

ハゲネは私にひどい仕打ちをし

愛する夫を殺害したのです。あの男を他の者たちから

引き離してくれれば、その人に私の黄金を与えましょう。

もしあの男以外の者が害を被ることにでもなれば、

私は本当に悲しいのですもの。

クリエムヒルトのねらいがあくまでもハゲネ一人であり、他の者に危害が及ばないように念じていることが、C版では繰り返し述べられる。すでにブルゴント勢到着後の最初の夜、ハゲネ討伐のために自分の郎党を差し向ける時、B1837の次に追加して、彼女は言う。「彼らを見つけたら、ただ一人の男、あの不実なハゲネ以外の者は討たないようにくれぐれも申して

おきます。他の者たちは生かしておくのですよ」(C1882, 2-4)。

また、両陣営の衝突が抜き差しならない状態に陥り、双方に相当の死傷者が出て、もはや和解が不可能になった状況で、B2086のあとにクリエムヒルトの行動を弁明する節が挿入される。

彼女はこのようなひどい戦闘を予想してはいなかった。
彼女の計算では、ハゲネー一人だけが命を失う
ということになるはずであった。しかし悪しき悪魔の働きで
事は彼らすべての者の上に及ばざるを得なくなった。(C2143)

頼みにするフンの武士たちがハゲネとフォルケールに恐れをなして手出しができず、ベルネの王にも不実(untriuwe)を見出せず(B1903, 1がC1951, 1では不実ではなく、援助の意志 den willen を見出せずと変えられている)、切羽詰まった王妃は王弟ブレデリーンを甘言をもって籠絡し、離れたところに收容させておいたブルゴントの郎党たちを襲わせる一方、戦いを始めるのに他に方法がないとして、こともあろうに我が子オルトリエブを犠牲にすべく、祝宴の席に連れて来させる。B版ではさすがにこれを非難して、「復讐のためとはいえ、女性の身でこれほど恐ろしいことを成し得る者があったであろうか」(B1912, 4)とその残酷さを咎めている。しかし、C版ではこの個所も女主人公を弁護するために、次のように改めている。

王侯たちがそこに座を占め
今、食事が始まった時、大広間の
君侯たちのところへエッツェルの王子が連れて来られた。
そのためにこの富貴な王は甚だしい悲しみを被ることになった。
(C1963)

そしてハゲネが王子の首をはねて、大殺戮の幕が切って落とされた。激しい戦闘が日暮と共に一旦下火になった時、ブルゴント方はエッツェルに和議を申し入れ、クリエムヒルトが断固これを拒否する場面で、姉との信頼関係を訴え情けをかけてくれるように願う弟に、

「そなたたちには恨みこそあれ、情けをかけることなどできぬ。
トロネゲのハゲネが私にあんなひどい仕打ちをしたのだから
生きている限り、和解など到底かなわぬ。
そなたたち皆でその償いをしなければならぬのだ」と

エッツェルの妃が言った。(B2103)

これがC2160, 2-4で「トロネゲのハゲネは故郷で私にあんなひどい仕打ちをし、さらにこの地で私の子供を殺したのです。そなたと共にここへ来た者たちにその償いをしてもらわねばなりません」と子ども殺しもハゲネの責任であることを明確にしている。この次の節でB版もC版もこの王子がハゲネの物妻い(mortlich) 敵意のために命を落とさねばならなかったと述べられているが、C版では更に、B1920(=C1971)の次に1節追加して、ハゲネがエッツェルの目の前で王子を打ち殺したことを、もう一度繰り返している。ここは祝宴の席で主人の王が妃の血縁の客人に大きな信頼を寄せ、客人がラインの国に帰国する折に、一粒だねの王子を連れて行って教育してもらいたいと申し出たのに対し、ハゲネが、王子は薄命の運命にあるようだから、それは無理だろうと、誠に不躰け極まりない言葉をはいた場面である。

多くの者はこれを聞き彼に腹を立て、
できれば彼を討ち果たしてしまいたかった。王とても
客に対する作法を破ってよいものなら
同様であった。そうしていればハゲネも苦況に
陥っていたことであろうに。
やがて彼は王子にもっとひどいことをした。
彼は王の目の前で王子を打ち殺したのであった。(C1972)

ハゲネ一人を人質に出せば、同じ母から生まれた兄弟姉妹なのだから、皆の命を助け、フン族の武士と和解の話もしようというクリエムヒルトの申し出に、ゲールノートがたとえ千人の親族がいたとしても、一人の人質を引き渡すよりは全員死んだ方がましだときっぱり妹の申し出を拒絶し、ギーゼルヘルも事ここに至っては如何ともしがたく、防戦の意志を固める

のであった。かくして和解の道が閉ざされ、物語は最後の大惨事に向かって、一気に突き進むことになる。

3

上で見てきたように、C版では明らかにクリエムヒルトを弁護し、免責しようとする意図が見られるのであるが、それと反比例するように、彼女の仇敵ハゲネを悪役に仕立てようとする傾向が認められる。強く (starc) 勇敢な (küene) トロネゲのハゲネは、C版ではことさらに言い換えられて、des küene Guntheres man (B984, 4) が der vil ungetriuwe man (C 993, 4) に、des grimmen Hagenen (B1281, 1) が des übelen Hagenen (C1301, 1) となり、また、羽衣を取り上げられた、予言の能力を持つ水の精が、その羽衣を返してもらいたさに呼びかける edel ritte Hagene (B1535, 2: ただ一個所ハゲネが ritte で表されているところ) も、C版ではただ her Hagene (C1571, 2) と変えられている。更に、クリエムヒルトの口から直接非難されるところで、der leide Hagene (B1260, 4) が der mordære Hagene (C1282, 4) とエスカレートし、追加の節でも den ungetriuwen Hagenen (C1882, 4) というように不実な殺害が厳しく咎められている⁹⁾。

このようにハゲネの不実、不正を際立たせ、評価を下げようとする傾向は、表面的な言葉だけでなく、根本的な彼の行動の動機づけにまで及んでいる。第19歌章でハゲネの勧めに従い、ゲールノートとギーゼルヘルのとりなしによってグンテルとクリエムヒルトの間の和解がなり、やがてクリエムヒルトは勧められるままに、ニーベルンゲンの宝をラインの地に運ばせる。この財宝とは12輛の荷馬車に満載して一日に三度往復して四昼夜かかって運び出さねばならないほど莫大なもので、しかもすべて黄金と宝石ばかりであった。

この夥しい財宝がラインの国へ運ばれて来ると、クリエムヒルトは惜し気もなく金品を施し与え、他国から武士を集め始めた。これを見て、いずれブルゴント一族にとって重大事なることを恐れたハゲネは、彼女からその財宝を取り上げるよう王に説きつける。これに対して、妹を不幸に陥れたことに後ろめたさを感じていたグンテルは、弟たちのとりなしでやっ

と和解できたばかりであり、その上、彼女を悲しませるようなことは二度としないと誓っていたので、そんなことはできないと、始めはなかなか首を縦に振らない。中世の騎士にとって誓いの持つ意味は極めて大きい。『イーヴァイン』で、アルトゥース王が王妃を連れ去りたいというメリヤガンツの不当な要求をそのまま認めたのも、願いは何であれ叶えるとあらかじめ誓っていたからであった⁷⁾し、NLであらゆる美德の父リュエデゲールが、一行をフンの国へ案内する途中、自らの居城に招いた際、娘との婚約を取り交した相手であるギーゼルヘルを、敵に回し心ならずも戦いに加わらざるを得なくなったのも、クリエムヒルトと交わした誓いのためであった。また、両妃の争いで侮辱されたプリュンヒルトの訴えを聞き、王がジーフリトに事の真相を問い質し、彼が嫌疑を否定してそれを誓言しようとした時、二人とも互いに心に疾しさを感じていたので、グンテルはジーフリトが誓いを立てる用意をただけで、一件落着を宣言したのも、偽証を避けるためであったと思われる。

ところがこの場面では、ハゲネから執拗に迫られ、自分一人を悪者にしてもらえばよいという言葉に、とうとうグンテルは妹との誓いにもかかわらず、ハゲネの暴挙を黙認する。弟王たちも事後にハゲネの行為に立腹するのみで、それを原状に戻すことまではしない。NLの王たちのこのような振舞は、理想的な宮廷騎士の姿とは程遠いものである。ハゲネが宝庫の鍵を取り上げたあと、王たちとハゲネとの間で、とかく災いの元になるニーベルンゲンの財宝を、彼らの一人でも生きている限り使わないように隠しておこうという誓いが立てられ、それはゲールノートの提案に従ってライン川に沈められることになった。しかも、それはハゲネが仕事をしやすいように、一門の主だった者がハゲネ一人を残して旅に出ている間である。

前稿で見たように⁸⁾、B版でもニーベルンゲンの財宝に対するハゲネの執着について触れられ、ハゲネの傲慢と不実が強調される。しかしながらそれはあくまでも、クリエムヒルト側から見た場合のマイナスイメージであり、ブルゴント側にとっては彼は無くてはならない勇士であり、ブルゴント一族の繁栄を支える忠臣である。ところがC版では、語り手は意図的にそのような肯定的ともとれるハゲネ像を歪め、その不実を強調し、繰り

返し宝に対する個人的な欲望に触れる。「彼はいつかその宝を利用できると思っていた」(B1137, 4)が、「彼はいつかその宝を一人で利用できると思っていた」(C1152, 4 下線は筆者, 以下同様)とされ, 更にもう一度追加の節で, 「彼は生きている間にいつかその宝を一人で利用できると思っていた」(C1153, 3)と繰り返される。

ハゲネがクリエムヒルトとの和解を勧めるところは, B版では次のように述べられる。

もしもあの方が我々に好意を持つようになれば, あなたはその宝の多くを手に入れることもできるでしょう。 (B1107, 4)

ところが, C版では下線部が, 「その宝の多くが我々のものになるでしょう」(C1118, 4a)と, ハゲネも宝の共有者となり, 更に, ハゲネの意図が宝を手に入れることにあることが, 改めて確認される。つまり「彼女がグンテルに対する憎しみの念を捨てようとした時, 彼が彼女に和解の接吻をするのは当然のことであっただろうが, もしも彼の同意によって彼女に大きな苦しみを与えられたのでなかったとしたら, グンテルも心軽くクリエムヒルトの前に行くことができたであろうに」(B1114)が, C版ではその後半の内容を変えて,

宝のためにこの暗殺計画が行なわれ,
まさにそのためにこそ, 不実な男(ハゲネ)が和解を勧めたのだ。
(C1127, 3-4)

と述べられている。

C版では更に, 宝を独り占めにしようとするハゲネの不実は, 主君グンテルに対する不忠にまで広げられている。最終歌章, 両軍の勇士もほとんど討ち死にし, ハゲネもグンテルもディエトリーヒの手によって捕らえられて, クリエムヒルトに引き渡されたあと, 彼女は「そなたが私から奪ったものを返すつもりがあるなら, 命を助けてブルゴントの国へ帰らせましょう」(B2367, 3-4=C2426, 3-4)と言って, 再度ハゲネに宝の返還を促すのに対し, ハゲネは主君の一人でも生きていうちは宝を誰にも渡さぬと誓ったのだから, それはできないと答える(B2368=C2427)。C版で

はそのあとに1節追加して、

彼は彼女が自分を生かしておかないことをよく知っていた。

これほど甚だしい不実があり得るであろうか。

彼はもしクリエムヒルトが彼の命を奪ったなら、彼女の兄を
故国へ帰らせるであろうことを恐れたのであった。(C2428)

このように、C版では宝に執着するハゲネ像を強調し、ブルゴントの王
に対する彼の忠誠までも否定するが、更にそれ以上に、ハゲネ以外の者も
宝に対する欲からこの陰謀に加担していたことがはっきり表わされる。B
1140に当たる詩節を内容を変えてB1136に当たるC1150の次に移し、その
4行目で「こうして彼らはその貪欲な心ゆえに宝を失うはめになった」
(C1151, 4)として、彼ら全員の共謀であることを示している。

クリエムヒルトに肩入れする語り手は、このようにハゲネのみならず、
グンテル以下ブルゴント一族全体を非難の対象にする。暗殺のために仕組
まれた狩の場で、ブドウ酒を隠したハゲネの奸策にのって、狩のあと喉の
渇きに耐えかねて泉まで競走する場面で、礼節を守ってグンテルの到着を
待ち、グンテルのあとから清水を飲んで泉から身を起こしたジーフリトも
「できれば同じようにしたかったことであろう」(B979, 4)。C版ではこ
こでグンテルが地面に這いつくばって泉に口をつけて飲んだが、それは、
そうすればジーフリトもそのあと同じことをし、彼が急所を示す十字の印
の付いた背中を無防備で曝け出すだろうと計算してのことだった、とはっ
きり述べている。また、それより先に、ジーフリトに対し信義を甚だしく
破ったのが、ハゲネからグンテルへと変わっている(B971, 4→C980, 4)
が、これはジーフリトに対し本来 *triuwe* を守らねばならないのはグンテ
ルであることを示したものである。ラインの三人の王はジーフリトに死ぬ
まで誠意を持って恩に報いる義務があることを口を揃えて明言していたの
である(B692, 3=C701, 3)。

ハゲネ、グンテルと共にブリュンヒルトについても、C版では評価を下
げようとする傾向が明らかである。ブリュンヒルトにとっては、ジーフリ
トが臣下であるということが何にも増して重要なことであり、それ故に、

クリエムヒルトを伴ってザンテンに帰ったジーフリトが、長い間臣下の義務を果たさないことが不満であり、また、訝しいことでもあった。

さて、グンテルの妻は、また、いつもこう思っていた。

「クリエムヒルトの夫、ジーフリトは私たちの臣下であるのに、あの人があんなに気位が高いのはどうしてかしら。

あの男はもう随分久しく、臣下の務めを果たしていない。」(B724)

この4行目がC版では、「なぜ彼が我々に務めを果たさないのか知りたいものです」(C731,4)となる。

やがて彼女は、気の進まないグンテルにしつこく迫り、遂にジーフリト夫妻をヴォルメスの宮廷に招くことに成功する。高貴な客人がブルゴントの国に到着し、和やかなうちに11日目まで無事に過ぎたが、ジーフリトをあくまで臣下と見做すプリュンヒルトの、内心穏やかならざる気持ちがC版では、B813のあとに特に2節追加して強調される。

その時王妃は思った。「もうこれ以上黙っていることはできない。

何としてもクリエムヒルトに言わせなければ、

我々の臣下であるあの人のお夫が、なぜこんなにも長く朝貢の義務をないがしろにしてきたのか、どうしても尋ねない訳にはいかない。」

こうして彼女は悪魔に勧められるままに、その時を待った。

彼女はやがて喜びも祝宴も、悲しみで終わらせたのである。

彼女の心にかかることが余りにも簡単に実現することになった。

そのために多くの国々で、彼女ゆえに大きな

悲しみの声が聞かれることになった。(C821-22)

更に、二人の口論の中でジーフリトを臣下だと、とうとう口に出して言ったプリュンヒルトに「美しいクリエムヒルトはひどく腹を立てた」(B823,4)。C版ではここがプリュンヒルトの台詞の続きとして、「あの人があんなにも長い間、朝貢の務めを果たさなかったのはけしからぬことだと思っています」(C832,4)とエスカレートする。このようにC版では、ジーフリトに臣下の務めを果たさせようとするプリュンヒルトの要求を何度も強調し、彼女が後の悲劇を引き起こした張本人であると決め付けること

によって、クリエムヒルトを免責しようとする語り手の姿勢が明白に示されている。そしてこのような語り手のクリエムヒルトに対する一方的な思い入れは、ギーゼルヘルへの描き方にまで影響を及ぼす。

気性の激しい傲慢な人物のすさまじいぶつかり合いの中で筋が展開するこの叙事詩にあって、やさしい弟ギーゼルヘルへのクリエムヒルトに対する思いやりは何かほっとする心暖まる情景を提供している。戦争が中止になったということで、ヴァスケンの森（C版では正しくオーデンの森）へ狩に行くことにしようと、グンテルがジーフリトに持ちかける。その狩にはグンテルとジーフリト以下主だった騎士は皆加わったが、ゲールノートとギーゼルヘルは城に留まった（B926, 4）。二人がなぜ狩に参加しなかったのか、その理由についてB版ではどこにも述べられていない。P. ピーパー（P. Piper）は二人が計画の邪魔をするかも知れないので、グンテルがわざと遠ざけたと考えられるとコメントしている⁹⁾。また、デ・ボーアも二人が凶行から離されていたことが示されているとしている¹⁰⁾。実際、侮辱された王妃の仇をジーフリトの命によって償わせようと主君に説きつけるハゲネに、特にギーゼルヘルはあくまで反対する（B866）。ジーフリトが暗殺されたあとも、悲嘆にくれるクリエムヒルトを慰められるのはギーゼルヘル一人であり、彼は常に姉に対して真心こめて誠実に接している。

B版では姉を慕い誠を捧げようとする若武者ギーゼルヘルは、その一方でブルゴントの安泰を願う気持から、守護神ハゲネの意見を無視する訳にもいかず、苦しい立場に立たされる。ハゲネが姉からニーベルンゲンの財宝を取り上げたのを聞いた時も、「もし彼が私の親族でなければ、生かしておかないところだが」（B1133, 3）と憤るが、さりとてこの不吉な財宝をライン川に沈めようという兄ゲールノートの提案にも反対できず、「私の体と財産の守護者になっておくれ」（B1135, 2）という姉の頼みにも、旅に出かけることになっているから、そのことは帰ってからのことにしようと言って、事を先延ばしにする。その理由についてはB版では何も述べられていないが、この時点では、恐らく王たちが国を留守にすることにし、その間にハゲネが宝をライン川に沈めるように相談がまとまっていたと思われる。そのため姉のたつての頼みにもかかわらず、それをすぐに約

束すればハゲネの蛮行を阻止しなければならない立場に立たされるので、時間をかせいで、それを避けたのであろう¹¹⁾。しかし情情的にはギーゼルヘルは、親族の中にいながら頼る者としてない姉の立場に、深い同情を覚えており、できる限り姉の力になりたいと願っている。悪しき計画が実行されたあとでも、「ギーゼルヘルはできれば彼女に真心を示したかったのであった」(B1138, 4)。ところがここもC版では「この騎士たちはその時、あたかも彼らがハゲネに敵意を抱いていたかのようなふりをした」(C1154, 4)と変えている。

このようにジレンマに苦しむギーゼルヘル像は、C版ではほぼ全面的に変更される。思いやりのあるやさしい弟のイメージが変えられ、彼もグンテルやハゲネの一味同心として、クリエムヒルトに仇なす敵側の一人として描かれ、他のブルゴント勢と同列に扱われるのである。上の第15歌章の最後の場面で、B915の代わりにC版では、次のように内容をすっかり変え、ギーゼルヘル、ゲールノートもジーフリト暗殺について同罪であると断じている。

この甚だしく不実な者たちが彼(ジーフリト)の暗殺を企んだ時、
彼らは皆それを知っていた。ギーゼルヘルとゲールノートは
狩に行こうとしなかった。いかなる恨みのために彼らが彼に
危険を警告しなかったのか私は知らないが、
彼らは後にその償いをする事となった。(C923)

また、第一部の最終章、第19歌章で、ニーベルンゲンの夥しい財宝がゲールノートに伴われてラインの地に運ばれたことを紹介するところで、B1124のあとにC版では新たに一節加えられ、ゲールノートとギーゼルヘルまでもがその宝を、更に後には、国も城も多くの家臣までも支配下に治めたことが述べられている(C1138)。

ところで、第11歌章B698と699の2節で、クリエムヒルトが晴れてジーフリトの妻としてザンテンの国へ立つことになった時、故国から千人の武士を伴って行くことになり、彼女はハゲネを呼び出して、一族を引き連れて自分に付いて来る気がないかどうか尋ねる。するとハゲネは色をなして、

言下に拒絶する。

彼は言った。「グンテル殿は我々をこの世の誰にも
お譲りする訳には参らぬ。
あなた様の他の御家来を連れて行かれるがよい。
トロネゲ一族の気質はよく御存知のはず。
我々はこの宮廷で王様の許に留まらねばなりません。
これまでお仕えした方々にこれからもお仕え致しますです。」

(B 698, 4-699, 4)

軽い気持ちで希望を述べたクリエムヒルトもハゲネの余りの剣幕に驚いて、すぐにこの要求を取り下げた。この場面はデ・ボーアも言うように後の二人の緊張関係の前触れとなるところであるが、C版ではこの2節がすっかり省かれている。これはクリエムヒルトに対するハゲネの将来の敵意に、その最初のきっかけを与えるものだから、C版では彼女の弁護のために除かれたと考えられている¹³⁾。

4

以上、3回にわたって「ニーベルンゲンの歌」のB版とC版について、その相違を検討してきたのであるが、その結果明らかになったことは、C版の方が先ず、叙述を正確にし、矛盾を正し、また宮廷的儀礼を重んじていることである。次に、キリスト教を意識し、不自然と思われるほど強調するところが目に付く。しかしながら、その改変は何よりも登場人物、とりわけ、クリエムヒルトとハゲネの描写に明瞭に表れている。J. ハインツレ (Joachim Heinzle) は「改訂者はテキストを形式的、言語的に当世風に改めた。彼はそれを内容的に補い、改良した。そして何よりも、恐ろしい出来事を道徳的な視点の下に解釈した」¹⁴⁾ と述べ、その結果、ハゲネがすべての悪の元凶、卑劣な殺人者とされ、彼の犠牲となった罪のないクリエムヒルトは、その行為がどれほど恐ろしい結果を招こうとも、triuwe という最もキリスト教的な徳操に導かれて、愛を貫いた受難の人として描かれることになったと言っている¹⁵⁾。

両雄並び立たず。ハゲネにとってジーフリトは個人的にも相容れない相

手であり、また、ブルゴント一族にとっても将来を危うくする可能性のある存在である。従って、そのような人物の妃となったクリエムヒルトの家来になることは、ハゲネにはとんでもないことであったが、世間知らずのお姫様は、そんな感情など知る由もなかった。B版では、このような純真無垢、無邪気なお姫様が、絶対の信頼を寄せていた血縁の者から何度も裏切られ、遂には復讐の鬼と化して一族の破滅を招来し、自らも凄絶な最後を遂げるに至る経緯が、劇的、かつ弁証法的に描かれている。そしてそこにこそNLのゲルマン的特質が表れていることを、我々は前稿で見たのであるが、C版では善悪両面を併せ持つアンビヴァレントな人物像を平板化し、罪と償いという中世的二元論に基づいて登場人物を描き分けている。

W. ホフマン (W. Hoffmann) はこのようなC版の改変について、「C版の方が二つの版の中で、いわばより中世的であり、英雄的、厭世的、悲劇的な世界観を制限し、痛ましい出来事を人間の過失、人間の罪の結果として合理的、道徳的に説明しようとすることによって、多くの同時代人の見解を表現したものである」¹⁶⁾ と述べている。そしてそれは、「偉大さと罪、偉大さと仮借ない人間の非情さをばらばらにし、ハゲネのような人物とクリエムヒルトのような人物のアンビヴァレントな面を、一義的な浅薄なものに解体する」¹⁷⁾ 結果を招いたとすることができる。それはまた、この二人の主人公だけでなく、グンテル、更にはギーゼルヘルまでも悪役に仕立て上げることになったのである。

我々がNLを一個の文学作品として、一大運命悲劇として鑑賞する時、構想力の雄大さ、人物描写の巧みさからして、やはりB版の方が深みがあり、B版に基づく『ニーベルンゲンの歌』こそドイツ中世文化を代表する英雄叙事詩とすることができるであろう。

テキスト

Michael S. Batts (Hrsg.): *Das Nibelungenlied. Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften*. Tübingen 1971.

Das Nibelungenlied. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch. Hrsg. v. Helmut de Boor; 20. revidierte Aufl. Wiesbaden 1972 (=Deutsche Klassiker des

Mittelalters, 3).

Das Nibelungenlied nach der Handschrift C. Hrsg. v. Ursula Hennig. Tübingen 1977 (=ATB, 83).

主要参考文献

Karl Bartsch (Hrsg.): *Der Nibelunge Not, mit den Abweichungen von der Nibelunge liet, den Lesarten sämtlicher Handschriften und einem Wörterbuch.* 3 Bde., Leipzig 1870-1880; Reprografischer Nachdruck. Hildesheim 1966.

Das Nibelungenlied. Mhd. Text und Übertragung. Hrsg., übers. u. mit einem Anhang versehen v. Helmut Brackert. Frankfurt/Main 1970/71.

Das Nibelungenlied. Übersetzt, eingeleitet u. erläutert v. Felix Genzmer. Stuttgart 1955 (=Reclam Universal-Bibliothek Nr. 642-45).

The Nibelungenlied. A new translation by A. T. Hatto. Middlesex 1965; reprinted 1978 (Penguin Classics).

Werner Hoffmann: *Das Nibelungenlied.* Stuttgart 1982 (=Sammlung Metzler, 7).

Derselbe: *Die Fassung C des Nibelungenliedes und die „Klage“.* In: *Festschrift Gottfried Weber zu seinem 70. Geburtstag.* Berlin, Zürich 1967.

Joachim Heinze: *das Nibelungenlied.* München, Zürich 1987 (Artemis-Einführungen Bd. 35).

注

- 1) Vgl. G. Benecke, W. Müller, F. Zarncke: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch.* Darmstadt 1854-1866; Reprografischer Nachdruck. Hildesheim 1963, Bd. I, S. 797 b 23ff. (以下BMZと略記)
- 2) Vgl. Matthias Lexer: *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch.* Leipzig 1869-1872, Bd. I, S. 164. 中高ドイツ語ではこのような意味で用いられることは稀であり, BMZには, 特にその意味での例は挙がっていないが, LexerにはNLのこの2個所が他の少数の例と共に記されている。
- 3) 『エッダ』中の「シングルズの短い歌」第26節参照。
- 4) Vgl. de Boor: *Das Nibelungenlied.* S. 271, Anm. zu 1717, 1.

- 5) Vgl. Karl Droege: *Die Fassung C des Nibelungenliedes*. In: *Zeitschrift für deutsches Altertum* 75 (1938), S. 93.
- 6) その他にも B 903, 1 (=C 910, 1), B 1001, 1 (=C 1012, 1) 等で von Tro-
nege Hagene が der ungetriuwe に変わっている。
- 7) 拙稿『ハルトマン・フォン・アウエの騎士道批判——イーヴェインの罪をめ
ぐって——』（阪神ドイツ文学会編『ドイツ文学論巧』XXVII.）。52-53ペ-
ージ参照。
- 8) 拙稿『「ニーベルンゲンの歌の写本について」——BとCを中心に——
その2』13ページ。
- 9) Vgl. Paul Piper: *Die Nibelungen* II. Teil. In: *Deutsche National-Litera-
tur*, Stuttgart; Sansyusya's reprint 1973, S. 203, Anm. zu 927, 4.
- 10) Vgl. de Boor, a. a. O., S. 155, Anm. zu 926, 4.
- 11) Ibid. S. 185, Anm. zu 1135, 3/4.
- 12) Ibid. S. 119, Anm. zu 698, 1.
- 13) Vgl. W. Hoffmann: *Die Fassung C*, S. 127.
- 14) Joachim Heinzle: S. 60.
- 15) Vgl. ibid.
- 16) W. Hoffmann: *Die Fassung C*, S. 132.
- 17) Ibid. S. 129.

〈付記〉 本稿は1988年度関西大学在外研究員として、ドイツ・ミュンヘンに1年
間滞在する機会を与えられた、その成果の一部である。ここに記して感謝
したい。

Über die Handschriften des Nibelungenliedes (III)

—unter besonderer Berücksichtigung von B und C—

Osamu TAKEICHI

Im zweiten Teil meiner Arbeit über *das Nibelungenlied* wurde die Grundkonzeption dieses Werkes aufgrund der Fassung B untersucht. Hier soll in einem Vergleich der zwischen B und C unterschiedlichen Stellen und der in C zugefügten Strophen die Konzeption der Fassung C erörtert werden.

Zuerst fällt uns in dieser Fassung C die Hervorhebung des Christentums auf. Bischof Pilgrim wünscht seiner Nichte beim Abschied, *daz si sich wol gehabete*. (B1330, 2) In der Fassung C wünscht er aber, *daz si den küninc bekêrte*. (C 1357, 2) Weiter werden in der C-Bearbeitung zwei Strophen angefügt, um sowohl Etzels Heidentum abzuschwächen (C 1284) wie die Tapferkeit der Christen zu betonen (C 2351).

In der Fassung C merkt man aber deutlich vor allem eine bestimmte Tendenz, einerseits die Heldin Kriemhild wegen ihrer Treue zu schätzen und ihr Verhalten mit der von Herzen kommenden Liebe zu dem von ihr über alles geliebten Siegfried zu entschuldigen. Andererseits hebt der Bearbeiter bei Hagen die Untreue hervor und belastet ihn moralisch viel stärker.

Es wird z. B. in C wiederholt betont, daß Kriemhilds Rache sich allein gegen Hagen richtet, und daß sie es vermeiden möchte, die anderen mit ins Unglück hineinzuziehen. (C 1882, 1937, 2143) Um Zusammenstöße zwischen den Burgundern und den Hunnen herbeizuführen, greift Kriemhild schließlich zum Mittel, ihr Kind Ortliop zum Opfer zu bringen. In B wirft ihr der Erzähler das vor: *wie*

kunde ein wip durch rache immer vreislicher tuon? (B 1912, 4) In C wird aber diese Stelle zu ihrer Entlastung gewendet (C 1963), und später bezichtigt sie Hagen des Mordes an ihrem Kind. (C 2160, 3)

In der Fassung C wird zweimal die persönliche Gier *des ungetriuwēn man* nach dem Nibelungenhort betont. (C 1152, 4; 1153, 3) Es wird weiter der Untreue gegenüber seinem Herrn Gunther beschuldigt. (C 2428) Der Erzähler tadelt dann außer Hagen auch dessen Herren und Brünhild. Seine Vorwürfe treffen sogar den jungen Giselher. In B verhält sich immer herzlich dieses *kint* zu seiner Schwester, und dient ihr versteckt oder offen. Aber auf der anderen Seite gehört er zu den Burgundern, daher kann er Hagen, *dem helflīchen trōst* von den Nibelungen, nicht einfach widerstehen. Er befindet sich mithin Kriemhild gegenüber in einem Dilemma. All dies verschwindet in der Fassung C. Hier leidet Giselher nicht mehr an einer Zwangslage, sondern wird genauso behandelt wie die anderen Feinde Kriemhilds.

Der C-Bearbeiter hat zwar manche Fehler und Widersprüche im Text berichtigt und beseitigt, aber indem er darüber hinaus die ambivalenten, mit sowohl guten wie bösen Zügen versehenen Charaktere vereinfacht, hat er die Grundkonzeption des Werkes geändert. Ein Vergleich der zwei Fassungen zeigt m. E., daß für das Heldenepos des deutschen Mittelalters das NL der Fassung B repräsentativ ist.